

庇護授産施設について

太田 真 略

庇護授産施設が精神薄弱者になぜ必要であるか説明しますと、精神薄弱者施設で保護・厚生された者もいるがだいたいぶんの精神薄弱者は施設にのこっている者の為と精神薄弱者施設の卒業生達が、どうしてもその生産能力において、又労働者個人として一般社会人に比べて劣る者が多い事を考えて、就職が困難又は不利になるのを防ぐために、比較的寛大な条件で生産し、就職できるような、庇護的な、彼らだけの為の特別な工場や仕事場を提供しようというもので、物的人に国や府県で支持するものです。ここでは単に物理的に寛大な条件で庇護するだけでなく、日常、この道の専門家による支持、指導が得られ、又無理解な人が混りこむことのない職場を作つてこの面から痛めつけられ、再び誤つた行動に陥らされ、脱落させられることのないように計られて人間での心理的な庇護もあわせ提供されます。

この制度、機構は彼らにどうしても多かれ少なかれついて廻るおおい難い不利益をカバーしてやつて、再脱落を防ぎ、かなり高い生活性とかない多い収入のある生活を彼らに保証してやれるという点では長所を持ちます。

だが一面、これにはいつまでも庇護が続くという欠点があります。彼らをとり巻く一般社会の状況や彼らに対する一般の理解をただちには好転し得ない限りこれもやむを得ないことも知れませんが、所がさらにこの種の授産施設は生の、本ものの生産機構ではないというためにうる制約、生きた生の、本ものの経済的社会の中に流れて真に乗り入れたことにならないためにうる生ぬるさ、不自然さ、今一步も二歩も生彩を欠く仮りものにして到達し得ない欠点があります。

二、折衷したものとしてホステルまたは「中間の家」を次に、收容授産施設のそれぞれが持つ長所と欠点を調整し、折衷したものとして用意したものがホステルないし「中間の家」と呼ぶものであります。

そこでは親もとを離れた宿泊施設ではあつても、適切な

指導力のある指導員が、休日や時間外勤務の日常生活の相談指導にも当たってくれますし、授産施設といった特別に庇護的に作りあげられたものでなしに、生の、本ものの工場なり仕事場が、しかも多種類で選択の余地を文句なしに多くする可能性のあるものとして用意されるでしょう。

三、その他の人たちのためにコロニー（保護集落）を

最後に、これらの庇護授産所へも、ホステルへも入れない人達は数年現存のままの生活がつづくでしょう。これらの人達にも人間として認められるべき最少限度の生活は保証されるべきであります。即ち低い能力ながらも社会的価値を生む作業や労働に参加する生活、望むならば結婚もできる集団生活―実際上はその多くは育児能力に欠けるものが多いため、優生手術をすすめねばならないでしょうが―、生産以外にも自由な余暇を楽しめる生活などが保証されるべきであります。そのような生活が保証される庇護的な特別の集落がコロニーであります。

そこには国や府県の財政的支持がなされて、この非運の

人達の人生を守り、個人としては、余りにも非力な親達の負担の肩がわりをし、社会全般の負担を最終的には可能な限り軽減することになる楽園、一見深刻な悲劇的な奇異な世界であつて、意外な程にそこにこそ人間の奸知のない、醜悪のない、天真らんまんが始めて現わに存在するそのような楽園、ユートピアが現出されるでしょう。

そこには千葉県下の特殊児童の街、グリナータウンのように、希望する保護者たちも一部移り住んで彼らを慰め励まし親自身かえつて救われる余地も残しておくべきでしょう。

十数万坪の敷地に集団宿舍や夫婦宿舍、集会娛樂室、広場を中心に、農耕園芸や牧畜もできれば、簡単な作業を提供する庇護授産施設も附屬さすことが必要でしょう。

このようにして四〇五〇〇人を收容できる規模が一単位として望ましいのであります。将来精神薄弱者にとつてさきへのべた施設がどのようにしても必要になつてくるでしょう。